

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	ヴァシリス・ダネリス「アリス」
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 24 : 93 - 110
Issue Date	2018-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046850
Right	Copyright (c) 2018 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ヴァシリス・ダネリス「アリス」

橘 孝司 訳

國立臺中科技大學應用日語系 助理教授

（カセット・レコーダーのスイッチが入る。足音。ピツク・アップのレコードが鳴り始める。トム・ウェイツの「アリス」^一。酒がグラスを満たす音。男の空咳。わずかな休止）

物語ってやつはどうやって始めるんだっけ。何かを物語ったことなどないからな。だが正直言う、ブルースやら女たちの宿命、酒と血に塗れたお伽話なんぞを書いてみたいとずっと思っていた。いつだったか勇気を出してある友に語ったことがある。気に入りの溜り場で音楽を聞きながらいっしょにビールを飲んでいた時だ。

ステイヴイー・レイ・ヴォーンが「ティン・パン・アレー」^二はこの世で一番ヤバい場所だとわめきたて、ギターがアニー^三の嘆きを奏でていた。俺は突然語りだす。相手はカップの縁のビールを見つめていた、うまい答えが泡から浮かび出てこないかとばかりに。

最後に奴は「忘れたほうがいいぞ。そんな話にはミシシッピーの背景が必要だ。ナイフを手にしたマツチヨな黒人やらローズとかいう名の愛人もな。オモニア^四にカティナ^五じゃ様にならない」

半分はその通りだ。たしかにオモニアには突っ切る川なんかない。噴水さえない。だが、ブルース、ジャズ、ロックなら入り乱れてる。筋肉隆々の荒くれ男たちだつて。あらゆる色合いの奴らがいて、手に転がる危なっかしい代物が闇にピカピカ光を放つ。

そんなこともあったが、ビールをもう一本空けると忘れてしまった。この手の銃口が吐き出す煙でたった今思い出したところだ。

（あおった酒が喉を通る音。ライターのカチツという響き。タバコのひと飲み、吐き出す音）

全ては三日前に始まった。ギターのコードを確かめながら指を走らせていると、想いはアリキの方へ飛んでいた^六。こんなザマがここ数ヶ月続いている。あの野郎のせいで彼女に捨てられて以来ムカつきが押さえられない。電話が二度鳴ったが出たくなかった。大事な用なら録音メッセージを残すだろう。こっちはそんな気にもならない。

とにかく仕事は酷い状態だった。俺はいちおう設計士だが、実際は落ちぶれたミュージシャンだ。エクサルヒア^七に二間^{ふたまた}のアパートを借りている。リビングが事務所で、部屋の方はスタジオになっている。一つきりのソファは夜のベッド代わりだ。家賃は、いまだにブルースを愛してくれるちっぽけなバーで音楽をやりながら週一で払う。後は、タバコ、酒、缶詰だが、設計事務所に来るささやかなプロジェクトで何とかやりくりする。たいていは後払いが頼まれごとだが。

電話がもう一度鳴った。録音機のスイッチ音が入り緊張した声。

「何で出ないの？ 会いたい。必要なのよ……夜《ピリナス》でライブだから。できたら来て。話したいことがあるの」

一瞬の沈黙の後、またカチッ。

アリキだ……四ヶ月ぶりの声。今回は俺をろくでなし呼ばわりして、もう会いたくないと喚きたてた。たぶん《エテ公^八》の顔をぶちのめしてやったのが我慢できなかったんだろう。やつのせいでこっちは捨てられたというのに。だが、どうしたと言うんだ？ 気変わりか？ 俺はギターをしばらく置き冷蔵庫からビールを取って来た。今夜会うのなら酒で頭を痺れさせておかなければ。

数時間でかなり飲んだ後、二本かかえて家を出た。《ピリナス》は広場のそばだが、すぐには行かなかった。カリドウロミウ通りとゾシマドン通りの交わる一角に爺さんがひとり暮らしている。路上の二つのゴミ箱の後ろか、雨が降れば奥に潜り込んでいる。ときどき俺はそばへ行って飲み物やタバコをおごってやり、いっしょに座ってダベる。正確には俺が喋り、相手は唸っているだけ。こっちの言うことを聞いているのかどうかさえはつきりしないが、だからこそ俺は爺さんとの話しが気に入ってるんだろう。その夜はアリキの電話やら俺の気持ち話を話した。相手は黙ってもう一本抜き取ると擦り切れた上着のポケットに入れ、ダンボール箱に寝転がってしまった。バーに着く。凍った空気を深く吸ってドアを押した。

その音が感覚を麻痺させる。奥の椅子へ進んだ。通路で知り合いが一人二人挨拶してくるが無視。目も神経も彼女に集中している。カウンター席に座った。数分後バーテンダーのジェニーがウイスキーを持って来た。

「元気にしてる、《ジョニー・ホワイト・ラベル》？　これ、いつものやつね」

自己紹介が遅れたな。俺はヤニス^九。だが、普段この名を呼ばれてもふり向かない。色んなニックネームで呼ばれるからだ。《ブラック・キャット》に《黒猫^{マウロガトス}》と、これは俺が不吉な星だから。簡単に《黒人^{マヴロス}》というのは、ニューオリンズの黒人に生まれなかった不幸と不満に敬意を表して。そしてジェニーのように《ジョニー・ホワイト・ラベル》と呼ぶのは、俺がこの同じ名の相手を、まあいろんな意味で敬愛してるから^十。

だがごく親しい友人なら《ブラインド・ジョニー・ボーイ》と呼ぶ。いや、目が見えないわけじゃない。ただ《ブラインド・ボーイ・フラー》、《ブラインド・ウイリー・ジョンソン》、《ブラインド・サミー》、《ブラインド・ウイリー・マクテル》^{十一}、他にも二、三あるが、その手のニックネームを俺は崇拜しているからだ。正確に言えば、《ブラインド》たちは《ブルースの壁》、つまりレコ

ード置き場の棚二段をすっかり占拠している。そう呼ばれるのは他にも理由がある。女への盲信だ。確かに俺は恋に落ちるとまっとうな判断ができなくなる。暗い穴倉に顔を突っ込んだモグラのようだ。しばらく経ってから、潰し器に飛び込みミンチにされかかっていると意識する。そうやって関係を絶ったときにはズタズタ。女たちに幸いあれ！　俺はみんなを愛した。一番はアリキだが。

今、彼女がライトを浴びてステージに立つのが見える。髪は顔半分を隠し、鼻は当てられたブルーの明かりに反射している。手は優しくマイクを包み込み、唇はほとんど触れんばかり。心臓がドキリとした。マイクが羨ましい！

彼女は髪に覆われていない方の、大きな黒い目を上げて俺を見た。バンドが休憩するまで他のことなど何も覚えていなかった。数分待った。明かりの落ちた中に登場。俺から一步はなれて立つ。だしぬけにキスしてやった。たぶんビックリしたんだろう。一瞬濡れた唇を許してくれた。それから退がって言った。

「お願い。ここじゃダメ。今はね」

それじゃ、「後」があるんだな、と俺は思った。

「ありがとう、今晚来てくれて。来ないかと思ったわ」

俺はへそ曲がりを取り取って「なんで呼びつけたんだい？」

顔を隠していた髪を耳の後ろに掻き上げた。黒痣^{あざ}が右の頬に広がっている。苦悩に満ちた極上の双眸が俺を見つめている。どっちの瞳に視線をやればいいんだ？「ぶたれるの」囁き声がバーの騒擾の中、俺の耳元で炸裂した。

荒っぽいやり方は彼女のいつものお気に入りだが、それはやり過ぎだ。

「それだけじゃないわ」急いで付け加える。

「手出しなんかさせない。なんで君は我慢してるんだ？ほら。すぐに出よう」苛立った俺はほとんど叫ばんばかりに彼女の腕をつかんだ。

「ダメダメ、できない。明日全部話すわ。以前のあの場所、四時に」

今この瞬間にできるのに翌日の四時まで執行猶予にするなんて無理だろ、と答える間もなく、《エテ公》が現れた。

「どうしたってんだ。この野良犬につきまとわれてんのかい、ベイビー」後ろから彼女の肩をむんずと抱きながらブツクサ言っている。

「いい差し歯だな。どこの歯医者だ？」四ヶ月前にへし折ってやった二本の歯を指しながら俺は言った。わざわざ治そうともしなかったようだ。

ジロリと睨んだだけで、アリキを連れてステージの方へ去った。彼女は思い入れたっぷりの目つきをこっちへ残す余裕があった。

「まだあの娘にひっかけられてんの？」ジェニーの声が届く。「はい、色男へおごり。ウサなんか晴らしなよ」

俺は答えず、ほとんど一息に飲み干した。

「テキーラを二杯」女が微笑んでから、カウンターの下にしゃがみこみメキシコの「毒薬」瓶の栓を抜くのが見える。

竜の彫り物が左のふくらした太腿から覗いた。尻尾はどこに続いているんだろう？ ミニグラスが来た。俺たちはグラスを鳴らしてあおった。手の甲で唇をぬぐった後、彼女に訊く。

「新しいお宝かい？」

「お好き？」

「よく見えないな。一番の見所がパンストに隠れてる」

「今晚泣かせたい？ 三時には上がるわ」

ジェニーとのたわむれは数年間続いている。うまく行

ってなどいない。言っただろ、女と寝るにはまず愛さなくては。太っちよのこのバーテンダーは俺の好みじゃない。すぐにちよっかいを出してくる手合いだ。

「わかった、答えなくていい。どうしてあの退屈な娘があんたを落とせたのかって時々思うわ。それに、そのあとどうしてあんなバカのためにあんたを捨てたのか……」

最初の半分は聞こえないふりをした。後の半分は全く同感だ。奴がギターを手に汗びつしよりで痙攣したように頭を振り、これぞ情熱と言わんばかりに顔を引きつらせているのが見える。バカなうえに才能ゼロと来た。

月最後の週のために、つまり来週だが、何とか取っておいた札を取り出し、カウンターに置いた。

「釣りはいい、慰めてくれた札だ」俺はそう言ってウインクした。

翌日は二時に目覚めた。ブラックコーヒーに冷えたパスタを皿半分。ビール二本。それから家を出た。弱々しい陽光が周囲の肥え太った黒雲相手に苦戦している。手のひらを暖めようとこすり、坂を上った。以前からの溜り場は広場に面したカフェニオだ。だが、角の雑貨屋は避けなくちゃならない。いくらツケにしているか覚えてな

いほどだ。それでブロックを遠回りすることにした。

広場の店はどこもごった返していた。大部分は学生。

それに何人かは俺のような閑人だ。カフェニオに入って見回した。まだ来ていない。だが、奥まった隅の古い映画ポスターの下にある俺たちの席は空いていた。腰を下ろす。「これはこれは！ ブルースの坊やか。どこにいたんだ、《黒猫》？ 雲隠れしやがって」店の親父の登場だ。俺の物語に端役で出たがっているとみえる。

すぐに、俺自身も信じられないような言い訳をする。ビールを注文して退場願った。あれこれ説明するのだけは勘弁してほしい。

ビールはすぐに来た。女はまだ。傍では若いのが二人、タブリ^{十二}に興じている。片方が最後に「四」のゾロ目で上がった。俺なら「一、二」^{十三}を出しかねない。

狭い店内に突然赤いスカーフが翻る。唇はもつと赤く、俺の心臓の動悸を真つ赤に射抜く。向かいのソファに飛び込んできた。頭上のハンフリー・ボガードが励ますようにこつちを見ている。女は手袋を脱いでタバコを取った。

「それで？」出来るだけ無関心を装って訊いた。

「助けてほしいの」と言っ、煙をこつちへ吹く。

「あん畜生が何をしたのか、やつと話してくれるのかい？」イライラと言ってからテーブルの上の華奢な手を包んでやった。

彼女は手を引つ込めると震える声で「ここじゃダメ。知ってる人が見てたら面倒になる。あなたの家の方がいいわ」

あちこち振り回されて俺の我慢は限界に達していたが、家と言われて落ちついた。

「行こう」と言つてやる。

彼女はタバコを消し、俺のほうはパンツに残つてた最後の小銭を探して、立ち上がった。半分残るビールを忘れるところだったが、二口で片付けた。向かいのハンフリー・ボガードが相棒を見守る目を投げかけている。

レコードを出してかけた。ウイスキーグラス二個。一つは彼女にだ。女はシートに埋もれたソファに腰掛けていた。向こうがそのつもりだったかどうかはともかく、俺は興奮していた。椅子を前に据えらるともう一度訊いた。

「それで？」

彼女はコートとセーターを脱ぎ、薄いブラウス姿になった。なだらかな肩と針跡のついた両腕が現われる。な

るほど。相手も俺がうなずくのを見て取った。

「中毒なの。一度冗談でやってみただけ……どうなるか知ってる？」

「知らないね」俺はあつさり答えた。

実際、俺は知らなかった。まあマリファナ入りの巻いたのはやるが、そんなハードなヤツまで進んだことはない。

「問題はわたしを強請することなの。わたしが薬を手に入れるには自分が必要だと承知してて、それを利用してる」

「《エテ公》が？」

「そう、ラブロスがよ」

わかりきつてたことだ、やつに走ったときから！　そう俺は叫びたかった。あん畜生は麻薬中毒で薬の売人だからな！

だが何も言わず、黙って彼女を見つめた。女は俺の心を読んだ。

「いいわ。わたしが間違つてた。その通りね。でも逃げ出したいの。だけど、離してくれない。完全に溺れてるんじゃないけど、時々薬が必要なの。でないと耐えられない。それにタダでくれるし。ただ、わたしを縛りつけ、自分の物だと思ひこんで。それにイラだつと薬なんか

やるかって脅して、叩いて、それに……それに……」声が破裂した。

「それに？」俺はしつこく訊く。

「それにね……ほんとに怖い」体が縮こまっている。

そばに行き、肩越しに抱きかかえてやった。手のひらが彼女の手のひらに触れる。ビリッと来た。

「何を怖がってるんだ、ん？ 言ってくれ」やさしく聞く。

「最近ボスに目をつけられちゃったの。あいつが薬をもらってる相手。甘いことばをかけて来るけど、卑猥な当てこすり。ラブロスはわたしと喧嘩するたびに、ボスにくれてやるって脅かすわ。」

俺は跳び上がり左右のものを蹴っ飛ばし始めた。怒りが堰を切った。

そうだったのか！ あの悪党を見つけガツンと強烈なのお見舞いだ。殺してやる。アリキも立ち上がり腕の中に飛び込んで俺をなだめた。とたんに俺の神経は休まり、動悸のほうが高まった。まあそんな感じで決心した。「ウチに来いよ。俺が守ってやる。ひどい目には絶対遭わさない」

感動に潤んだ目で俺を見ながら言った「ああ、やつぱ

りあなたなら頼りになる」

そうして俺の腕の中から離れると、体のふれあいは途切れた。同時に俺の荒い息も。

「でも守れないでしょ。手荒い仲間がいて、あなたもやられちゃうわよ。そんなこと、させられない」

「気にするな。必要なら君のために死んでもいい」二人の仕切りなおしが仄見える。勇氣を得て俺はそう答えた。また腕の中に倒れこんできて泣き始めた。

「愛してるわ」のささやき。地球が回転をやめる。

視線を上げ涙で濡れたつぶらな目で俺を見つめた。

「遠くへ逃げましょう。見つからないところへ」

「町から町への旅。俺はギターで、君は歌うんだ」興奮して俺は言った。

彼女は微笑んだ。

「ステキな話ね。でもまず薬を抜かなくちゃ。クサンシ^{十四}にセンターを見つけたの。そこなら探そうとはしないはずよ」それで分かったが、実は以前から逃亡計画を温めていたようだ。今はただ俺の気持ちを確かめたんだろう。

「じゃクサンシへ行こう」俺は躊躇せずに言った。

すぐに逃亡できるという幸福感がキスとなり、さらに

どんどん高まっていった。俺たちは床の上を転がり、最後によりやくソファで息を切らせていた。

外はすっかり暮れていた。アリキは起き上がりタバコに火をつけた。俺はその裸体を愛で、彼女のためなら人殺しだってするぞと心に誓った。なんとも大馬鹿野郎だ！

「それでさ、いつ発つのか？」尋ねてきた。

「好きなときに。いまからでも」

「明日朝のほうがいいわ。あなたが銀行からお金をおろしてすぐ」

そのことばは何千もの鐘の音のように俺の耳に響いた。「どの金だって、アリキ？　俺が一文無しだって知ってるだろ？」

二つの灰色の影が黒い瞳に漂った。そばに滑り寄ってくると俺の腿の上に手を這わせ、

「脱麻薬のプログラムは一万かかるの。どうやって払おうか？」

俺は答えられなかった。

彼女はまた体を離すとゆっくりとタバコを吸い始めた。しばらくして、

「いいわ。ラブロスのところに戻る。しかたない」

怒りがこみ上げた。彼女の肩をつかんで揺さぶった。

「そんなこと考えるんじゃない！　方法はあるはずだ。歌で稼ごう。犬のように働いて、来る仕事を何でもこなして、金を集めるんだ」

「ダメよ、ヤニス。そうはいかないわ。すぐにプログラムを始めなくちゃいけないの。わたし一人じゃ無理」

「ふたりならできるさ」

「できない」

「できるよ、できると言ったらできる。きっと何か手があるはずだ」

俺は目を相手の目にじっと合わせた。血が出るのではと恐れるほど。ややあつて、ためらいながら彼女は囁いた。

「たぶん一つ方法がある、でも……」

「《でも》はない。言ってくれ、何でもするよ」

「ダメよ、とっても危険なことなの。万一あなたに……」

「俺の気持ちに分からないのか？　必要なら死ぬ覚悟は出来ている」

顔は数センチのところにあった。

「わかったわ」と囁いてキスしてきた。

もう一度抱擁しあってから、俺は尋ねた。

「さてと。どんな計画？」

「まず、ちよつと考えなくちや。明日二時にここへ戻る。そのときすべてを話すわ」

帰ろうとするのに俺は強く反対した。何を恐れていたんだろう。その夜のラブロスの虐待をか？ それとも翌日の午後帰ってこないことをだろうか？

結局夜の道にするりと出て行き、俺のほうは体につけられた痕を数えながら横になっていた。シャワーも浴びずに眠り込んだ、彼女の香りを体に残したまま。

目を覚ました後は昨夜の続きだ。彼女の香りをかぎ、体の痕を数えた。何度も何度も。そのうちベルが鳴った。

俺の腕の中に飛び込んできて、また初めから。そうして数える痕が増えていった。

その後俺に向かつて計画を話した。二日前のこと、《エテ公》がボスと話すのを半分ほど聞いたらしい。昨夜はもつと聞くことができた。

聞かされなければよかったのに！

今晚ヴァシス広場^{十五}のとあるバーで取引があるらしい。麻薬の売人が一人でその場に来る。そういう取り決めだ。客は大物だが、手下に金を持たせて遣わす。ブツ

の量や金額などは詳しく聞けなかったが、でかい取引なのは確かだ。約束は夜中の一時。

計画はひどく危なっかしいが、俺たちが金をたつぷり持つて逃げるには唯一の望みだった。そいつが金を受け取ったら、俺は後をつける。頃あいを見て、それを奪い取る。なんとも簡単だ……

「で、どんな風にやるんだ、アリキ？ 後ろからバッグをかつさらって、走って逃げるのか？」

「そんなじゃないわ」秘密めかして言うと、バッグから紙袋を取り出した。

中には銃。リヴォルヴァーだかコルトだか、四十五口径だか知らないが入っている。何にしる俺は区別できない。

「どこで見つけたんだ」俺は驚いて訊いた。

「オモニアの近くよ。籠に並べて売ってるわ」

いつもながら大げさだ。

「つまりヤクの売人を銃で脅して金をたんまり奪うってこと？」途方もない話だ。

「そうよね、無理だわ。この話忘れて！ ラブロスのところに戻るわ」と彼女。

またあいつが会話にしゃしゃり出てきた！ 俺が死ぬ

か、彼女を盗られるかだ。こっちが死ぬ方がましだな。
「オッケー、やってみるよ」そう言っただけ俺は武器を手にとった。

とたんにキスと甘い囁きの雨。俺は弾倉を開けて中を確認めた。弾丸が四発。

「二発足りない」驚きが口をつく。最近誰かが使ったのだろうかと思えるとゾッとした。

「知らないわ、買ったときからそうだった。別にいいでしょ。撃つことはないんだから。ほら、そんなことはほつといて。抱き寄せてよ」

俺はすぐに弾丸もピストルも忘れた。数時間後に顔を合わせる野郎の顔もだ。

ビールは尽きていた。ウイスキーを掘り出したが、封は切らない。設計用テーブルに載せ、目で味わった。今夜生き延びるチャンスを少しでも増やしたいなら、素面でいなくてはならない。

金曜の夜。アテネは昼間よりも息づいている。誰もが夜の訪れとともに街角に繰り出すのをワクワク待ちわびているかのようだ。バカ騒ぎ、酔いつぶれ、恋のたわむれ。そして俺は破滅に向かって歩んでいる。

路地で自分の車を探し当てた。何日も使っていない。実際のところ動くかどうかさえ怪しい。エンジンをかけ、ギアをサードに入れた。そうしておいて一服やりながらエンジンが温まるのを待った。

マルニス、アハルノン、リヨシオンの三つの通りが交わるあたり^{十六}で車を乗り捨てた。二分とかわからず、貧相な《ロキシーズ・バー》が見つかった。一時十五分前。鉄の塊が腹を圧迫するのを感じる。頭は焦りでガンガン鳴り、手は汗でびっしょりだ。

中は狭く薄暗かった。わびしい音楽。全部で十あまりのテーブル。空席は少なく、その一つに向かう。客たちの顔を観察し始めた。大部分は外人のようだ。ほとんどが連れで来ている。求める男の特徴に合うのはただ二、三人だった。

年齢定かならざる女が俺のテーブルに近づいてきた。片言のギリシャ語で連れがほしいかと聞く。息抜きのために受け入れてやる。いっぱいおごってくれない？　こっちが上の空でうなづくとかウンターへ行き、背の高いグラスにウイスキーと氷をたっぷり入れて持ってきた。俺は顔の筋肉がひくつくのを押さえようとした。相手はこっちのうなじを撫で始め、あんたのことを話して、と

言った。その場で思いついた話を口にして後は女にしゃべらせた。

男が一人バーに入ってきた。

アルバニアから来たの、と女は言う。

男は俺が目をつけていたテーブルの一つに座った。トラベルバッグをテーブルの男の傍らに置く。

貧乏バーの女はもう一杯ほしいとばかりに科しなをつくる。

二人の男は身を寄せて話し始めた。

女は俺の胸をさわり腹の方へと手を滑らせて行く。俺は手を押しとどめ、鉄の塊に触れるんじゃないと言った。文字通りの意味だ。女は理解せず、ユーモアがある人ね、と笑った。

片方が立ち上がって、後から来た方の置いたバッグをつかんだ。どっちを追い駆けるべきか？ わからない。

アリキのくれた紙幣を出し、その、えっと、名前を覚えてないが、その女に渡した。

後から来た男は座ったまま一人でウイスキーを飲んでいた。そばにはふくれたブリーフケースが置いてある。

こっちだろう、と当たりをつけた。

五分後俺たちは外に出ていた。運よく相手は俺の車のそばに駐車していた。だが、忌々しいことに俺のボロ車

は動かない。だが、今ここでおいて行かれるわけにはいかない。肝心な時に！ 最後に何とか動き出した。パティオン大通り十七の信号で追いついた。アレクサンドラス通り十八を曲がると、スピードを速めた。こっちもアクセルを一杯に踏む。老いぼれた車体がキーキー唸り始めたが、何とかすぐ後ろにくらいついた。ハランドリ十九に着くと、距離を取って路地へと行って行った。

道々俺はずっと考えていた。どうやって金を奪う？ 不意を突くのか？ 相手はプロ、こっちはギャングごっこを気取るバカ者だ。

気の利いた策を考えつく間もなく、奴はマンションの駐車スペースへ車を乗り入れる。俺はすぐに人ひと気のない路地に駐車し、マンションへ駆けた。意外だった。麻薬の売人の住処がどんなものかなど知らなかったが、整備中の庭と駐車場のある中流家庭向けマンションに住んでいるとは思わなかった。

とっさの思いつきから家の鍵を取り出し、相手に呼びかけた。

「ちよつと待って」玄関ドアが彼の後ろで閉まる直前に言った。

驚いたように俺を見たが、入るのを待ってくれた。

「すいませんね」俺はホッとしたように言った。

結局何とか入りおおせた。二人はエレベーターに乗った。

「何階ですか」訊かれるより先にこちらから尋ねた。

「四階」ぶっきらぼうな答え。

俺は四階と六階のボタンを押した。数秒間奴の顔を吟味する時間があった。アリキを娼婦にしようとしている野郎の顔だ。その面は並のギリシヤ人以上のものじゃない。美形でも不細工でもない。伊達男じゃないが、その逆でもなし。ジェルとコロンをつけたガタイのいい野郎だ。見慣れた、どこにでもいる奴。秘密の生業だからな、と俺は考えた。

こっちが観察している間、奴はもっと速く押し上げてやるとばかりに天井の照明を睨んでいた。四階に着くと会釈してエレベーターの扉を押し開けた。俺は閉まる前に押さえた。ブリーフケースを下に置き部屋のドアの鍵を開けるのが見えた。

今しかない、そう考えて俺は突進した。

銃を背中に押しつけると囁いた。

「ゆっくりと中へ入れ」

たぶんどこかの映画を真似していたんだろう。相手は

本当に驚いたようだ。ドアを開けたまま、屈んでケースを取ろうとした。

「おっと。そいつは放って置け」そう言って銃身を背中に押しつけた。

されるがままだ。俺はケースの取っ手をつかんで中に入った。俺の方を向くと、

「お前誰だ？」困惑したように、だが冷静に言った。

窮地のはずの状況に悠々と対処するのを見て、俺はイライラした。ピストルが汗ばんだ手のひらで滑り始めた。

「この野郎、アリキに売春させるなんて俺が許さない」ゴロツキの声音を作って言ってやった。

「誰だそれ？ 何の話だ？」

「とぼけるな。なんの事か分かってるだろ！ あの娘に目をつけて娼婦仲間にしようとしやがって」

笑い。

「わかったよ！ 誤解があるようだ」と言った「俺はポシ引きじゃあ……」

言い終わる前に銃声が聞こえた。音の元が自分だと分かるまでに数秒かかった。相手は手を上着の内ポケットに入れようとしていた。弾丸は奴の腹のあたりに当たった。壁を背に床にうずくまり、シャツは血だらけだ。

「誰が寄越した」喘ぎながらささやく。

「頼まれたんじゃない。アリキのためにやったことだ。お前や《エテ公》のために娼婦にはさせないぞ」俺はわめいたが、耳に届くその絶望の声は一層自分をゾッとさせた。

「《エテ公》？ 何の話だ。そのアリキってつまり誰なんだ？」質問はイライラさせるが嘘は言っていないらしい。いやな感覚が喉元から足指まで伝っていく。痺れを感じた。

「《エテ公》はお前がヤクを売ったラブロスのことだ。アリキはな、俺の恋人だ、わかったか！」俺は叫び、思い出せとばかりに奴の顔の前で銃身を振り回した。

咳き込み、同時に笑い出した。

「なるほど、今はつきりした。あの売女がお前のアリキか」

口元を殴りつけてやった。だが、俺の中でこいつの言うことは正しいとがなり声がしている。奴は血を吐いた……それに消化液まで。

「兄ちゃん、騙されたな。あいつらのために腐れ仕事をやらされたんだよ。だが、俺にも責任がある。ラブロスは能なしのヤク中毒だと思ってた。やられたよ」

「何をくつつちゃべってる？」

「あの阿呆の前で取引を約束した。中毒の症状など知らないと思っていたからな。一発やって、ぶっとんでたよ。取引の秘密をうまく黙っているように見えたが。その後お前に別のエサを投げやがった。奴の女のことだ。俺から金を横取りするために。自分がやればすぐバレると知ってたから……」

咳をしてさらに血を吐いた。

全てのパズルのピースが嵌まってきた。こいつの言う通りだ。一番のバカはこの俺だ。上着の内ポケットを探った。ピストルが……いや、柔らかい、とても柔らかいぞ……ただの箱だ。

「一本吸おうとしたんだよ」にやりと笑って言った。

「喫煙は命を落とすぞ」そう答えて、一本火をつけ、くわえさせてやった。相手はタバコの火とともに息絶えた。

窓を開けて風に打たれながら長いこと車を飛ばした。

火薬で焼けた金属が腹をヒリヒリさせる。隣にはほぼたつぷり五十万ユーロが鎮座している。

車を止め雑貨屋に向かった。おやじは俺を見ると怒りでどす黒くなったが、百ユーロ札を投げてやると静まっ

た。借りを払ってから書類ケースとビールを四本抱えて外に出た。

物乞いの爺さんはゴミ箱のところで俺を待っていた。こつちを見ると微笑んだ。黄ばんだ髭の間からボロボロの歯が覗く。二人で飲みながら全部話してやった。相手はタバコを一本抜き取りしわくちやの上着に入れると段ボールに横になった。

ポケットに手をつ突っ込んで俺は立ち去った。今夜は寒さがこたえる。

アリキに電話した。最初のコールで出た。待ちかねたという声だ。すぐに家に寄るよう言った。熱狂して女は電話を切った。

俺はバルコニーの暗い一角で影のように身を丸くし、タバコを吸い始めた。寒さに神経は動かない。顔面の筋肉の感覚はなく、脚の感覚もない。なにも感じられない。やって来た。女が角を曲がるのが見える。腕が後ろへ引き戻す。角から身を乗り出した《エテ公》の横顔がキスを始めた。俺は中に入って待った。

ベルが鳴った。ドアを開くと飛び込んできてキスの嵐。俺は動かない。

「どうしたの」ぎよっとして訊く。

「全部知ってる」と俺。

「全部って何？ どうしたのよ？ お金は盗ったの？」
「盗った」

「ああ、すごいわ。あんた。やったじゃない、愛してる」
「芝居は終わりだ、アリキ。君たちのからくりは知ってる」

「でも……」

「やめろ。ヤクの売人が死ぬ前に全部しゃべったよ」

「殺したの？」

彼女の声と目にはパニックが宿った。

「ああ」

百八十度方向転換。突然の作戦変更で来やがる。

「わたしのせいじゃない。ラブルスに無理矢理させられたの。脅されて、殴られて。わかるでしょ！」

俺の胸に顔を埋め泣き始めた。もう少しで信じそうになる。信じたかった。だが無理だ。

「さつきキスしてるのを見た……ダメだ！ 黙るんだ。電話してここに来させる。余計なことを言わずに」

すぐに現れた。俺のと同じ銃を手に入ってきた。つまりは籠で売っているのは本当だな。

「さがれ」と吠えた。

「何かされたのか、ベイビー？」とアリキに訊いた。
彼女は頭を横に振った。

「金は盗れたのか？」

今度は縦に。

「どこだ？」

「燃やしたよ」俺は冷たく言った。

「冗談はよせ。撃つのはわけないぜ」

俺は微笑み、譲ってやった。

「あっちの部屋の中だ」

「先に行け」と命令。

俺は進んだが、戸口で立ち止まった。

「止まるんじゃないやねえ」イライラと銃を振り回しながら命令する。

「ここまでだ。ほしいなら一人で探せよ。あのコンソールテーブルの奥だ」一番離れた角を指して俺は言った。

決心がつかないようだ。

「どうした？ 撃つかい？」俺は皮肉に言って後押ししてやる。

あちこち蹴つとばしながら、武器を床に置いてオーデオ機器を放り出し始めた。何も見つからない。俺の方

に向き直った。

「野郎ダメしやがったな」

銃のことは忘れて飛びかかってきた。俺は自分の銃を抜いていた。今回は誰が銃声を立てたのか明らかだった。奴は崩れてくたばった。

弱々しい拳骨を背中に感じた。

「殺したのね！ 殺した、この畜生！ 酷い奴！」彼女はわめき立てた。

振り返って目を見つめた。パツチリした黒い瞳が濡れている。怒りと絶望と愛に満ちた双眸。俺じゃない野郎への愛だと！ 銃声がさらに一発。その目を見ているうち、やがてその中から忌々しい感情が消え去った。

もう一発残っている。それにタバコ一本。スタジオからカセット・レコーダーを持ってきた。レコードをかける。設計デスクの上に乗ったままだったボトルを初めて開け、この物語を始めた。

いいさ、俺はもうメチャクチャだ。わかってるよ。どこまで話したつけ？

（カセットが止まる。巻き戻し。カチッ）

《……盲信だ。確かに俺は恋に落ちるとまっとうな判断ができなくなる。暗い穴倉に顔を突っ込んだモグラのようだ。しばらく経ってから、潰し器に飛び込みミンチにされかかっていると意識する。そうやって関係を絶ったときにはズタズタ》

今度ばかりは潰し器から逃れられそうにない。

(短いポーズ。空咳)

レコードが終わった。ウイスキーもタバコも終わり。このカセットを見つけたのが警察なら、告白に使ってくれ。その後アンドニスに渡してほしい。いっしょに曲を聴きながらビールを飲んでいた奴だ。この話が気に入ったなら書きとめてもらいたい。ローズはいないが、アリスならいる……

(銃声)

【註】

一「酔いどれ詩人」の異名で知られるアメリカ人歌手。「アリス」

は二〇〇二年の作品。

二 米ダラス出身のブルース歌手・ギタリスト。「ティン・パン・アレー」は一九八四年の曲。

三 「ティン・パン・アレー」歌詞中の登場人物。

四 アテネ中心の広場。一九九四年までは噴水があった。

五 女性名「カテリーナ」の愛称。野暮ったい女の代名詞。

六 「アリキ」は「アリス」のギリシャ語形。

七 オモニア広場から北東にある地区。国立考古学博物館やアテネ工科大学（一九七三年反軍事政権蜂起の舞台）があり、パソコンショップやコミック店が並ぶ。多くの知識人や芸術家とともに、社会主義者やアナーキストも居住。難民移民の集中する地域でもある。

八 「エテ公」の原語は *pithekos*。猿に似た毛むくじやらで醜い男を指す隠語。

九 「ヤニス」は「ジョニー」のギリシャ語形。

十 ウイスキー名にかけている。

十一 いずれもアメリカのブルース・ミュージシャン。

十二 バック・ギャモンのこと。

十三 最低の出目。三マスしか進めない。「一、一」のようなゾロ目なら四倍進める。

十四 ギリシャ北東トラキア地方の町。ブルガリアやトルコ国境に近い。

十五 オモニアのすぐ西の居住区。

十六 ヴァシス広場の近く。

十七 オモニア広場付近から北上して国立考古学博物館前を通る大通り。「十月二十八日大通り」の別名。

十八 アテネ郊外に通じる大通り。アッティカ警察本部がある。

十九 アテネ北東部郊外の地区。二〇〇四年以降日本大使館が置かれている。

【解説】

「アリス (Alice)」はギリシャの若手ミステリ作家ヴァシリス・ダネリス (Βασίλης Δανέλλης) の二〇〇八年の作品。ギリシャのラジオ局「九〇二左派 (902 Αριστερά)」^{アリステラ} (ギリシャ共産党のラジオ局。九〇二は周波数よりの命名。現在は「902.gr Web Radio」の名でネット配信) のミステリ・ドラマ・シリーズ「泥棒と警察九〇二 (Κλέφτες και Αστυνομίσι στον 902)」の台本として書かれた。書籍出版はされていないが、作者御本人から『プロピレア』への掲載許可を得てここに翻訳した。(番組自体は現在も次のページで聞くことができる。

<http://radio-theatre.blogspot.com.tr/2013/06/902.html>)

ヴァシリス・ダネリスは一九八二年アテネ生まれ。二〇〇六年に英国留学の後、ジャーナリストとして各種の新聞、雑誌に寄稿する傍ら、短編「街が牙をむくとき」(『ギリシャ・ミステリ短編集 (Ελληνικά εγκλήματα)』第三巻、二〇〇九年、カスタニオティス社) でデビュー。この作品はアテネで起きた異なる種類の三つの事件を描き、都市の街角に潜む危険を浮かび上がらせている。処女長編作は『黒いビール (Μαύρη μπίρα)』(二〇一一年)。以来『アスフォデイルの園 (Αιβάδια από ασφοδίτι)』(二〇一四年)『列車の男 (Ανδρώπος στο τρένο)』(二〇一六年)と続き、二〇一七年最新作『死の時間 (Νεκρές ώρες)』が出版された(いずれもカスタニオティス社刊)。短編作品には、「グレイドウォーター事件」(『危険への扉』二〇一一年、メテフミオ社、「不幸な偶然」(『ベカス警部の帰還』二〇一二年、カスタニオティス社) などがある。本人は自分の基調はノワールだと述べている。「アリス」も裏社会と関わりを持った主人公がストレートに破滅へ突き進む。しばしば米国、メキシコ、スペインなどのノワールものの舞台を訪れ、その体験を作品に織り込んで

いる（例えば、「グレイドウォーター事件」の舞台はテキサス州）。

現在はトルコのコンスタンチノーブル（イスタンブール）に住み、政府プロジェクトの一環としてギリシャ語を教えながら、執筆が続いている。二〇一〇年に創立された「ギリシャ・ミステリ作家クラブ（E.A.S.A.A.）」の事務局メンバーを担当、ギリシャ・ミステリの紹介に努めており、最近ではギリシャ、ブルガリア、クロアチア、ルーマニア、セルビア、スロヴェニア、トルコ七カ国の短編ミステリ・アンソロジー（二十一編所収）のギリシャ語訳を編集出版したばかり（『バルカン・ノワール（*BalkanNoir*）』二〇一八年、カスタニオテイス社）。

ちなみに、先の『ギリシャ・ミステリ短編集』（正確には『ギリシャの犯罪』）は、現代ギリシャの代表的なミステリ作家の書き下ろし短編を収録したもので、第一巻（二〇〇七年）以降、第四巻（二〇一一年）まで出ている。一九六〇年代から活躍する重鎮アシナ・カクリ女史を初めとして、テオ・アンゲロプロス映画の脚本でも知られ

るペトロス・マルカリス、「ギリシャ・ミステリ作家クラブ」の初代、及び第二代会長を務めたアンドレアス・アポストリデイスとティティナ・ダネリ女史など、各巻十〇十九名の書き下ろし短編を含んでおり、ギリシャ・ミステリの現状を概観するのに格好のシリーズ。現在のギリシャを舞台とする作品だけではなく、コナン・ドイル「ギリシャ語通訳」の外伝めくA・アポストリデイス「ギリシャ語翻訳」や十二世紀中世ビザンツ帝国の文人が探偵を務める歴史ミステリのパナイヨティス・アガピトス「哲学者たちの夜」など毛色の変わったものもある。

なお、一九五〇年代から始まる現代ギリシャ・ミステリの創始者ヤニス・マリスについては、以下の小論に素描されているので、御覧いただければ幸いである。

橘孝司「ギリシャ・ミステリの父ヤニス・マリス——その魅力と変遷」『プロピレア』二十一号、二〇一五年。